



La Laisse

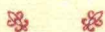
愛は束縛

フランソワーズ・サガン

河野万里子 訳

Franço

その愛は
あまりにも
私を残酷にする・・・



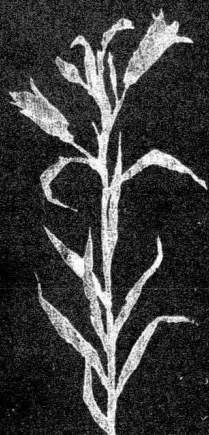
愛の束縛、愛の哀しみを描くサガン待望の恋愛長編。

新潮社版

愛は束縛

フランソワーズ・サガン

河野万里子 訳



新潮社



LA LAISSE

© Editions Julliard 1989

Japanese edition first published in 1991 by Shinchosha Company

Japanese translation rights arranged with

les Editions Julliard, Paris

through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo

あい せくばく
愛は束縛

フランソワーズ・サガン

こうのまゐり
河野万里子訳

発行 1991.9.25

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社 郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話：業務部 (03) 3266-5111

編集部 (03) 3266-5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© Mariko Kono 1991, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り

下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-503015-9 C0097

価格はカバーに表示してあります。

愛
は
束
縛

ニコル・ヴィズニアック・グランバックに

ぼくは忍び足で、寢室の闇の中へ戻った。暗がりですえ、女性的な趣味に満ち満ちたむせ返るような寢室だ。壁は花々の絡み合ったあでやかなインド更紗きんぎょで覆われ、ローランスのまとうた甘美な香水は重たく澱んで、部屋中、息苦しいほどに濃厚な匂いがこもっている。これではまたすぐ頭が痛み出すに違いない。寢室は例によって、窓も鎧戸もぴたりと閉ざされている。ローランスは思春期にツベルクリン接種で二、三度陽性になって以来、いまだに、眠る前には部屋を閉め切りなさいという母親の言いつけを、必ず実行するのである。

だがぼくはたった今、明け方のパリの、目が覚めるように新鮮な空気を、田園のようなすがすがしい空気を、胸いっぱい吸ったところだった。暗い寢室を抜け出して浴室へ行き、窓をすべて開け放つて、まる五分、深呼吸を繰り返した。さわやかな力が体中に満ちてきた。おかげでこうして再びベッドに戻り、香水の香りをふんだんに放っているローランスの上にかがみこんでも、もはや、頭が痛み出すことはなかったのだ。いつもとは少し違う気分だった。ぼくの美しい妻、ローランスは、まだ眠っている。出会った頃から目にとめていたとおり、長い黒髪に包まれた彫りの深い顔立ち、ロマネスク様式の乙女の彫像を思い起こさせる。ふと、その顔が動き、吐息をつくように呼吸した。ぼくはいっそう身をかがめ、彼女の首筋に唇を押し

当てた。ローランスの肉体は、今咲き誇る花のようだ。本人がほっそりした体の線に執着しているのとは裏腹に、豊かに息づいており、男の目を魅了してやまない。薄闇の中に、ほのかな蔷薇色に染まって浮かび上がる肌。妖しい翳りを落としてゐる黒いまつ毛。さらにその先の素肌をもう少したどろうと、ぼくはそっとシーツに手をかけた。反射的にローランスは、怒ったように肩までシーツを引き戻した。

「ああ、だめ。やめて、そんな氣まぐれ……まだ明け方でしょう。本当にあなただったら。おとなしくしていて」

残念ながらローランスにも、女性によく見られるつまらない癖があった。ベッドで、彼女より先にぼくの方から求めようとすると、物憂げに「もうあなただったら、それしか考えていないんだから」とつぶやき、その逆だと、消え入りそうな声で「ねえ、私のこと、もう愛していないの?」とささやくのだ。そして——彼女の端正な容姿にふさわしい、古典的な表現を引くのなら——艶事つやごとには、炎のように燃え上がるのである。しかしローランスは、愛の行為を娼婦のようにしゃべる女ではない。世の中の大半の女性と同様、子供じみたむき出しの表現をしまうというだけだ。もつとも、愛についてすべてをたしなみ深く言葉にできる女性など、一体どこにいるであろうか? 男にしたところで同じことだ。ぼくの知る限りでは。

「そうか」ぼくは言った。「喧嘩していたんだったな」

「喧嘩なんかじゃないわ。ただもう、悲しくなってしまうたのよ」

「悲しくなってしまった? どうして? ぼくが何をした?」だがそう言いながらもすでに、悪かったのはまた自分のせいになるのだらうと、ぼくはあきらめ始めていた。

そもそも喧嘩の種は、自分では全く心当たりのないことだ。ゆうべの会食の席で、ぼくが銀

行家の妙齡のご夫人と、二重の意味にとれる親しげな会話を交わしたというのだ。

しかしその場にいた銀行家というのが、多くの義父とつき合いのある人物だったのがいけなかった——義父は我々の頭上を覆う雲のような存在で、七年前からほぼ絶交状態になってしまっている。七年前、あの人はよくを卑怯者と怒鳴りつけ、無垢でしかも財産もある一人娘を横取りしたくて結婚するのだらうと、頭ごなしに決めつけた。その上義父は腹の底に気持ちをおさめておくことができず、大声でわめき散らし、ののしり続け、ローランスさえ深く傷つけてしまったのである。それが再び今、ゆうべの銀行家が義父に会ったなら、よくはローランスを奪っただけでなく笑う者にまでしている、と言われかねない。ローランスが嫌な気分になったのも無理はなかった。七年たった今も、彼女は父親が自分の結婚を恥としか思わず、表向きには会ってさえくれないことを、悩み続けている。

彼女とよくが会ったのは、よくがパリ国立高等音楽院のピアノ科を卒業して二、三年過ぎた頃だった。そしてあつという間に結婚してしまった。まだ彼女の父親が、よくに大音楽家になるだけの才能があるのかどうかと危ぶんでいたにもかかわらずである。もしその後、よくがある映画音楽の作曲を偶然たのまれていなければ、七年という歲月の中で、義父はますますよくへの不信感を強めていったに違いない（あるいは不信感さえ抱かなくなっていた、と云うべきだろうか）。映画は成功し、音楽にはさらに熱狂的な喝采が寄せられた。それはまさに、一つの大きな勝利であつたと言っている。よくのメロデューはヨーロッパ中の歌手に歌われ、ヨーロッパ中のオーケストラに、ソリストに、演奏されるようになった。現在ではアメリカにまで広まろうとしているのだ。手元にはいささか金も入ることになり、今までローラン스에世話になっていた分を少々返すことさえ、夢ではない。ところが奇妙なことに、よくのこれまで

の無為と挫折の年月には毅然と対処してきたローランスが、この輝かしい幸運にはなぜか怯えを示し、悔やんでさえいるようなのだ。ぼくの新たなチャンスも、喜びも、決して一緒に分かち合おうとはしない。ぼくの胸には、そんな彼女の態度にひそかな恨めしさが募り始めていた。

一方映画音楽は、評判に評判を重ねて、とうとう稀に見る大ヒット曲となった。それにつれて、世間の興味も作曲者個人にまで押し寄せてきた。ローランスは顔色を変えた。そしてすぐさま、ぼくをバルト海に浮かぶ小島へと引っ張っていったのだ。《あんな下品なマスコミ》の手から、逃れるために。ありありと軽蔑の色を浮かべて、彼女はそう言った。留守の間にマスコミの連中は、仕方なく映画監督や俳優たちにインタビューをしてまわったらしい。我々が帰ってきた時には、パリはすでに、ぼくなどには何の関心も示さない街に戻っていた。それでもローランスは、ぼくまでもがマスコミの共犯者であったかのように、怒りと苛立ちと——そして軽蔑と——を消そうとはしなかった。

だがローランスの不機嫌さを責めるうちに、ぼくは次第に彼女の気持ちにも気づき始めた。ローランスは未来の名ピアノリスト、偉大なマエストロと結婚したつもりだったのだ。結婚したかったのだ。ところがぼくはそうはならなかった（もつともそうならなかったことについて、彼女は一度もぼくを責めたことはない）。それどころか流行歌の作曲家になってしまった。彼女はそのような男と結婚した覚えはないのだ。《ヒット曲メーカー》などのために、由緒ある家族のもとを去り、父親に刃向かい、遺産を相続させないという脅しにまで敢然と立ち向かってきたのではない。夫であり音楽家である人間をジゴロ呼ばわりする、スノッパな音楽馬鹿の連中に、七年も黙って夫をつき合わせてきたわけではない。もつともそのジゴロという言葉も、全くの中傷とは言い切れないのが現実なのだ。ローランスはぼくと同年齢とはいうものの、人

の心を捕えずにはおかぬ美貌と、音楽への情熱を、あわせ持つてゐるからである。

いずれにせよ彼女は結婚する時に、芸術はお金より大切なものよ、ときっぱり言い切つた。だが上流階層に棲むローランスの家族や親戚にしてみれば、それはなんともくだらない主義でしかなかつた（ぼくは何か間接的な方法で、彼女の言葉を借りれば後腐れのない方法で、彼らに芸術が勝る証拠を見せてやりたい、と常々思い続けてきた）。ローランスは、俗物で偽善に満ちてゐるくせに無道徳なこの階層の人々にぼくを認めさせるため、父親がぼくを軽蔑するのは当然だという空氣と闘わなければならなかつた。義父にとつて予想外であつたのは、自分の妻、つまりローランスの母が、遺言で自分個人の遺産はすべて我々に譲ると書いていたことであらう（あの人はこの家族の中で、好感の持てるただ一人の人物だつた）。彼女の母親には何か心をひかれるような魅力さえあつたので、あまりにも突然舞い込んだ死の知らせには、血のつながりのないぼくでさえ悲嘆の淵に沈んだものだ。ともかく、こうして我々二人のこれまでを考えるなら、今は、ぼくがローランスにやさしくしなければならぬ一番なのだつた。

「ローランス、ぼくがきみを裏切るわけがないじゃないか。きみだつてわかつてゐるだろう。ね」ぼくはたたみかける。「よくわかつてゐるだろう。きみのことは決して悲しませまいと決めてゐるんだから。なにしろ食べ物も家も、着るものもこづかいもたばこも車も保険も、皆きみが……」

「やめて！」ローランスは叫んだ。

ぼくを養つてゐることを慈善行為のようにあげつらわれるのは、我慢ならぬのだ。もつと正確に言うならば、自分にそのようなことをさせてゐる人間が、本来なら自分を養つてくれるべき夫に他ならないと意識することが我慢ならぬのだ。それ以上の感情は、精神的なマゾヒ

ズムに近づいていくとでも感じているらしい。それに、何不自由ない暮らしができるのも自分の財産と気前良さのおかげなのだと思ひ出させたところで、その分夫の愛情が深まることなどありはしない、と思ひ込んでいるようだ。

「そんなこと言うのはよして！」ローランスは起き上がった。「よして！」そしてぼくの首に腕を巻きつけた。「よして」ぼくの頬に、柔らかな頬が触れた。

「ほらほら」ぼくは腕の中の彼女をやさしく揺すり始める。「ね、きみも見ただろう、あの気の毒な女性。あんなに痩せて貧弱で、髪は黄色いし、鼻は上を向いているし。ね？」

「ええ、そうかもしれないわね。そうね、やつぱり……」

「ああいうのがぼくの好みだとも思つたの？」ばかばかしくて、ぼくは小さく笑いを漏らす。「自分の姿を鏡に映してごらん」

ローランスはうなずき、「そうよね、本当に」とつぶやいた（これ以上言い返すのは魅力的ではない、と踏んだのだらう……だがそもそも女性の論理というものは、自分の幸せを中心にしか動かないものだ）。まったく、この次あの夫人と会う時には十メートル離れておくことにしよう。

ぼくは立ち上がった。

「さて、と。じゃあ《一文無し》を襲いに行くとするか」出し抜けにぼくはそう言う、と、精一杯の笑顔を作つてみせた。言い古されたこのあだ名の洒落など、今では可笑しくも何ともない。だが、なんとかローランスが笑ってくれるといい。そうすれば、ぼくは部屋を横切りドアのところまで行くことができる。彼女の顔から笑みが消えて非難の色に変わる前に、そしてぼくの笑みが、うしろめたさの影に覆われる前に。ローランスはぼくが一人で外出するのが好きでは

ない。神経質なのか、性格的にぼくとは全く違っているのか。だがはつきりとそう口にすることはないで、ぼくの方も時々それを無視させてもらっている。いずれにせよ今のぼくには、外へ出かけたいと駆り立てられることこそ、七年の結婚生活の末のはっきりした反動のように思えて仕方ない。結婚生活そのものによってもたらされた気持ちに思えて、仕方ない。

ぼくはドアにたどり着き、階段に出た。《一文無し^{バザンス}》とは、ぼくの所属音楽事務所の社長兼プロデューサーのことだ——その事務所で、ぼくの作った映画音楽「にわか雨」の版權管理などを行なっている。事務所の名は、《デルタ・ブルース・プロダクション》。社長は絶えずニューヨークと行き来して、万事アメリカ流で気取っている。しかしパラスーなどという名前と、ウエストを絞った背広に二色コンピの靴といういでたちでは、南仏出身だということは誰の目にも明らかだ。本名は、フェルディナン・パラスーという。金には卑しく、そのためには平気で何でもやりかねないプロデューサーだという芳しくない評判も立っている。だがその一方で、自分の秘蔵っ子にはそれ相応のものを払う力もある、とささやかれてもいる。もし秘蔵っ子が彼にたっぷり金をもたらすような仕事をすれば——ぼくのしたことだ——そして、支払いを強硬に要求すれば——これこそ、無二の親友、コリオラン・ラトロの力を借りて、これからぼくがしようとしていることなのだ。

コリオランとぼくは同じ年で、同じ過去を分かち合ってきた。ぼくたちは同じ年に、同じ区の同じ街で生まれた。同じ高校に通い同じ部隊で兵役につき、同じ女の子たち、同じ貧しさを分け合っていた。だがそれも、ローランスが現われて、終わりとなった。ローランスとコリオランは、初対面からすでに水と油だった。そして事あるごとに反発し合い、次第にぼくにも手がつけれなくなっていくのだ。ローランスはコリオランのことを、暮しぶりや職業のこと

をとにかく言うつもりはないけれど、あの人は私たちのことを利用している、と非難する。コリオランはコリオランで、なんだあのブルジョワ女、自分の役割に酔っているのか、と言いつつ。最初は冷やかしかつ半分だった言葉も、時と共に、ぼくに対する抗議へと変わっていった。

コリオランとぼくは、カフェ「リヨン・ド・ペルフォール」の前で待ち合わせていた。そこがぼくたちの根城、ぼくたちのいつものカフェだ。コリオランが働いている自動車修理工場はダゲール通りの端に、そしてアルバイトをしている馬券屋はフロドヴォー通りの端に位置しており、このアパルトマンからは車でわずか二分で行ける。

ローランスの母が残してくれた不動産の中から、彼女とぼくは、ラスバイユ大通りの坂の上にたつこの瀟洒なアパルトマンの、五階にある広々とした一角を選んでいた。ラスバイユ大通りは、かつて多くの芸術家たちが集った名残りをとどめる街にあり、地理的にはモンパルナス大通りを越えたすぐの所、つまりコリオランの所にもぼくが子供の頃過ごした地域にも、三百メートル程度の距離だ（ローランスには、このことを知られないように気をつけていた）。もしわかっていたら、彼女は親戚の所有している不動産すべてにあたって、ぼくが隅から隅まで知っているこの街から一番遠いアパルトマンを選んだに違いない。ローランスはぼくを、全くの無防備にしたかったのだ。そして全く新しい生活の中で、ぼくに新しい愛を、新しい安らぎを、新しい行動半径を、自分一人で与えたかったのだ。あいにく、お抱えピアニストを誘拐しようという彼女のその夢は、あまりうまく実現されはしなかった。その後引越した際しても、彼女の企てはすべて失敗に終わっている。もちろんぼくには、ローランスが決めたことや、彼

女の考えるそういう幸せに逆らおうという気持ちは毛頭ない。それは、ぼくの幸せでもあるのだから。いや、そのように考えることで、ローランスには逆らわないようにと、ぼくの内面の何もかもがぼくを押しとどめていたのかもしれない。だがそうしてあらゆることを規制されているうちに、ぼくの中にはいつしか鬱屈した苛立ちがわき起こるようになり、まるで女性のように、しばしば頭痛に悩まされるようになった。重苦しい沈黙、底なしの無力感に、とり憑かれるようになった。するとローランスの方も、それほどのさくぼくを縛らなくなったのだ……だから、ぼくたちはここにこうして、今もいる——ラスパイユ大通りに。

コリオランとの待ち合わせ場所はすぐ近くだったが、ぼくは車で行くことにした。三年前の誕生日にローランスから贈られた、素晴らしいスポーツ・クーペである。それはさながら、一匹の黒い、美しい野獣だ。敏捷で、精悍で、ラヴェルの音楽のようにしなやかに駆け抜けてゆく。その上今朝は、気まぐれに顔を見せた太陽の光を全身に浴びて、まぶしいほどに輝いている。ぼくは野獣と親密なひとときを味わおうと、ラスパイユ大通りからモンパルナス大通り、ロプセルヴァトワール通り、と回り道をした。野獣は喜んでのどを鳴らすかのように、低いエンジン音をとどろかせる。パリの街は人影もなく、がらんとしていた。このところ、青空と通り雨が目まぐるしく入れ替わる天候が続いているためだろうか。誰もがレインコートを脱いだり着たりしなければならぬのに嫌気がさして、どこかへ避難してしまっているのだろう。人気のない道はボンネットの下で濡れて光り、まるで巨大なオットセイの上を走っているかのような。滑りやすい路面が果てしなく続き、光が震えるようにきらめく。ぼくはふと、大きな光の球体の中に、音もたてず痛みも感じずに入り込んでゆく錯覚に襲われた。太陽と雨が溶け合い、気体と液体が溶け合い、雲と風とが溶け合った、めくるめくような感覚の空間に——そ

れは、氣象学だけではとても説明のつかない——たまたま何かの拍子で天がためらった時だけに、突然目の前に開ける、まばゆいばかりの世界だ。一方、昨夜の嵐のような強風は、ためらうことも容赦することもなく、猛然と木々を揺さぶり、葉たちの運命を弄^{もて}んだらしい。葉は年齢も境遇も一切無関係に、枝から引き剥がされている。枯れて赤茶けた葉、まだ若々しい緑の葉、あどけない芽生えたばかりの葉までもが、今も風に舞っている。輪郭をきちんと保っているものもあれば、白い葉脈しか残っていないものもある。無意識のうちに、ぼくはワイパーをつけていた。フロントガラスにへばりついた葉は規則的な動きで掻き分けられて、曲がりくねった細い雨の筋と混じり合ってゆく。そうして葉は二つのかたまりに分けられ、振り払われ、溝へ、彼らの最後の草原へ、と落ちてゆく。その時ぼくは見た。冷たいウインドーに張りついた葉が、じつとこちらを見つめ、すがりつくように何かをぼくに訴えているのを——だが都会人のぼくの瞳には、それが何であるのかわからない。

時としてこのように感覚が鋭くなるからといって、（一般的にぼくぐらいに情緒が安定している人間ならば）神経の発作だと騒ぐには及ばないだろう。人間は、ある領域に関しては、全く無知な存在にすぎないからだ。しかしまた、人間が手で触れられるものすべて、損なうことのできるものすべて、傷つきやすくも押し黙っているもの——恐ろしいほどに押し黙っているもの——すべてについて、それぞれに神経や苦悩があり、叫びや呻き声を出していると想像するのはつらいことだ。ぼくは時折すっかり打ちのめされたような気分になる。音楽家であるから詳しいのだが、たとえば耳一つをとっても、人間よりも犬の方がはるかに敏感であり、人間はまわりで発せられている音の百分の一さえ聞き取れてはいない。植物にしても、踏みつぶされると非常に精巧な音声機能で、独特な叫び声を上げているのだ。

「やあ！」

車のドアが開き、コリオランの顔が現われた。陽気な笑顔の陰に、陰影に富むスペイン系の風貌が息づいている。外見の雰囲気と実際の性格とが異なるのは厄介なことであろうが、コリオランの場合はその落差が人をたじろがせるほどはなはだしい。一見彼は、不運に見舞われ、凋落の道をたどったスペインの貴族さながらで、思いやりある親友たちでさえ、悲しみに沈んでいる姿ほどコリオランに似つかわしいものはないと惚れぼれしてしまう。だが女性にしてみれば、これはたまったものではない。貴族に身を任せただけで、一夜明けて目覚めてみると、隣にいるのはノーブルとは言いがたい愉快な男なのだ。おかげでコリオランは思いきり騒がたいようなパーティーでも、その気持ちを抑えて愁いをたたえていなければならぬのである。さもなければ同伴した女性の情熱を掻き立てることもできない。愁いをたたえていれば、彼はスペイン貴族が女性を魅了し誘惑できるのと全く同じように、女性たちの心をつかみ、ときめかせる。だがいったん腹の底から笑ってしまうと、貴族のふりをしたがつたにせもの、人を当惑させ不快にするように、座をしらけさせ、人々を怒らせてしまう。こんな中途半端な運命のいたずらに捕えられたら、普通の人間ならば多少性格が歪んでくるに違いない。だが、コリオランは違った。彼には高潔さがあり、勇気があり、誇りがある。表情にもそれらがにじみ出ている。だが貧乏暮しをしているので、普通の人にはそれが無自覚さ、頑固さ、尊大さとしみ映らないのかもしれない。ともかく、彼は多くの友達だ。親友だ。そしてよくが結婚してからは、たった一人の親友だ——というのも、ローランスは友情や友達とのつき合いについて、ほんとと同じ考え方ではなかったからである。

「どこへ行くんだい？」長い手足を折り曲げて助手席に身を沈めながら、いつもの明るい笑顔

でコリオランは言った。ぼくに会うたびに、顔中に広げる彼の愉快そうな笑み。突然ぼくの胸に、熱い感謝の念がこみ上げてきた。誰よりも誠実で、誰よりも思いやり深いコリオラン。ぼくは横目で彼の格好をちらりと眺める。着ているものからすると、やはり金には相当困っているのだろう。だがそれでも、ローランスからの金では一切受けつけないに違いない。そしてぼくは、この七年間、ローランスからの金しか持つてはいなかった。

「^{バザンス}一文無し」から何が何でも金をふんだくるんだ」ぼくは断固とした口調で言った。「そこいら中で『にわか雨』が鳴っているっていうのに、まだ著作権協会が何も支払ってこないって言い続けている」

「まるで詐欺だな」低く落ち着いた声で、コリオランは言う。「そんな話ばかりじゃないか。おまえにいくらか金が入るたびに……もし十フランなら、一フラン五十は持つていくわけだろう。それも請求書を送って、金の計算をしているだけでだぜ？ おまけに支払いもきちんとないときた。めちやくちゃだね！ 一体どんなやつなんだ？」

「そうだな」ぼくが答える。「ニースだかトゥーロンだか、そのへんの出らしいな。なかなか愛想はいいんだけど、やたらとニューヨークにかぶれていてね。まあ、会えばわかる」

「おれに任せてくれ」コリオランは両手を揉みながら、きっぱりと言った。

それから大声で、シューベルトの四重奏曲を歌い出した。ここ一か月というものの、ずっとそのメロディーが頭から離れないのだという。この自動車修理工兼馬券屋は、学生時代には、音楽評論家として一世を風靡した大物だった。彼には驚くばかりの記憶力と音楽的な素養の深さがあっただけでなく、あらゆる時代の音楽に対して天性の鋭い直感を持っていた。権威あるヨーロッパの雑誌も世界中の演奏家たちも、絶えず彼の意見に耳を傾けたものだ。だがコリオラ